

令和 6 年 6 月 25 日現在

機関番号：34316

研究種目：若手研究

研究期間：2020～2023

課題番号：20K13787

研究課題名（和文）独居高齢者の社会的孤立と精神的孤独の解消に向けたオンラインコミュニティ機構の創出

研究課題名（英文）A Study of Online Community Mechanism to Alleviate Social Isolation and Mental Loneliness Among Elderly Individuals Living Alone

研究代表者

高原 まどか（Takahara, Madoka）

龍谷大学・先端理工学部・助教

研究者番号：40823000

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 3,300,000円

研究成果の概要（和文）：本提案の目的は、独居高齢者の精神的な孤独感と社会的孤立を解消することにある。具体的には、以下の3つの課題に焦点を当てて研究を遂行した。まず、独居高齢者の健康状態と対人関係の実態調査を実施した。次に、独居高齢者が望む他者との距離感についての調査を行い、最後にこれらの結果に基づいて、適切なプラットフォーム（機構）を構築することを目指した。しかしながら、新型コロナウイルスの影響により、提案の実施に必要なフィールドワークと実態調査が困難であったため、本研究の第一歩として、独居高齢者の健康状態と対人関係、そして望まれる他者との距離感や地域の支援に関する調査を実施した。

研究成果の学術的意義や社会的意義

本研究は、独居高齢者の健康状態と対人関係の具体的な実態を明らかにし、それに基づいた支援策の必要性を示した。これにより、独居高齢者の生活の質を向上させ、社会的孤立や精神的孤独感を軽減するための具体的な施策を提案することが可能となる。また、学術的にも新たな知見や理論的枠組みの構築に寄与することが期待される。

本研究の成果は、具体的なデータに基づいた介入方法の開発や評価に役立つ。エビデンスに基づいた支援策の提案とその効果検証を行うための基盤となり、独居高齢者に対する支援の実効性を高めることが期待される。

研究成果の概要（英文）：The purpose of this proposal is to alleviate the mental loneliness and social isolation of elderly individuals living alone. Specifically, the research focused on the following three tasks. First, a survey was conducted to understand the health conditions and interpersonal relationships of elderly individuals living alone. Next, the study examined the desired interpersonal distance for these individuals. Finally, based on these findings, the goal was to develop an appropriate platform (mechanism). However, due to the impact of the COVID-19 pandemic, the fieldwork and surveys necessary for implementing the proposal were challenging. Therefore, as the first step of this research, we conducted surveys on the health conditions and interpersonal relationships of elderly individuals living alone, as well as their desired interpersonal distance and community support.

研究分野：社会情報学

キーワード：独居高齢者 支援

1. 研究開始当初の背景

平成 30 年版高齢社会白書では、2016 年の時点で約 656 万人が独居高齢者である。今後、独居高齢者人口は更に増加すると見込まれており、2035 年には 841 万人(人口の 37.5%) の高齢者が独居高齢者になると予測されている。独居高齢者の増加が引き起こす社会問題は孤独死であり、地域社会との接点がなく社会から孤立することが主な原因である。

一方、日本では、このような独居高齢者の精神的孤独や社会的孤立に対して、地縁や血縁の希薄化による独居高齢者の縁を補完すべき、家族以外のネットワークやボランティア、地域活動への参加などといった社会や地域における人々の信頼関係や結びつき、つまり、ソーシャルキャピタルが世界に比べて極端に乏しい。

このような背景から、独居高齢者のソーシャルキャピタルの再生において、既に一部地域では、高齢者の地域コミュニティ参加における活動支援の取り組みや、独居高齢者の見守り、生活支援等の取り組みが実施されてきており、一定の成果をあげてきている。一方で、独居高齢者の継続的な地域コミュニティへの参加が実現出来るかは、彼らの心身状態が良好で、かつ、彼らの望む距離感とタイミングにて人びととコミュニケーションを取ることが出来るかどうか重要であるが、上述の取り組みにおいても、現状で、独居高齢者の精神状態や加齢による身体的な負担の変化から、独居高齢者の継続的な地域コミュニティへの参加は実現出来ていない。

今後、独居高齢者自身が主導的かつ継続的に、彼らのソーシャルキャピタルを再生し、見守り・支援を獲得する為には、独居高齢者が加齢による精神的・身体的な負担を意識せず、かつ、独居高齢者が望む距離感とタイミングにて、地域の人びとや子供たち、医療機関、独居高齢者の親族や支援者、更には他の高齢者等、多様な人柄や状況の人びとと繋がりを持つ仕組みの実現が必要不可欠となる。

2. 研究の目的

本研究課題では、「高齢者と彼らの支援者からなるオンライン上のコミュニティにおける、IoT を活用した見守りと支援の仕組みを通じて、独居高齢者の希薄になった人との繋がり再生は可能か」を問いとして設定し、オンラインコミュニティ機構の構築に取り組んだ。具体的には、独居高齢者の精神的孤独と社会的孤立を解決するために、特に、独居高齢者の加齢による精神的・身体的負担の特徴に着目し、IoT を活用し、独居高齢者が自宅に居ながらにして地域コミュニティへの参加および支援の確保を可能とする、“オンライン地域コミュニティ” の構築の為の基礎研究を以下の 3 つの課題に分けて行う予定であった。

独居高齢者の健康と対人関係の実態調査

独居高齢者が望む他者との距離感、地域への参加や支援の獲得方法の調査

それに基づくプラットフォーム(機構)の構築を目的とする。

3. 研究の方法

本提案研究の実施に必要なフィールドワークと実態調査は、新型コロナウイルスの影響により困難であったため、本研究の実現の第一歩として、本研究では、独居高齢者の健康状

態と対人関係に関する実態調査，そして独居高齢者が望む他者との距離感や地域の支援に関する調査を実施した。

4．研究成果

結果として，独居高齢者の健康と対人関係に関する具体的な実態は，以下のような点が挙げられた。

(1)健康面：

- ・身体的健康：独居高齢者の中には日常生活の自立が難しく，身体的な介護や支援が必要なひともある。特に移動や日常動作に支障をきたすような要因が高齢に伴って増加する傾向がある。
- ・精神的健康：孤独感やうつ病，認知症など精神的な健康問題に直面することがある。

(2)対人関係：

- ・家族との関係：独居高齢者の中には，家族とのコミュニケーションが不足していると感じるひとがいる。家族との距離感や支援体制が問題となることがある。
- ・地域コミュニティとの関わり：地域のイベントや集まりへの参加，地域ボランティア活動などを通じて地域コミュニティとのつながりを築くことが重要であるが，交通手段や体力の問題から参加が難しい場合もある。

これらの健康と対人関係の実態に対処するためには，個々の状況に合わせた支援プログラムやサービスが必要であり，また，地域社会全体での支援体制の強化や，テクノロジーを活用したソリューションも検討する必要があることが分かった。よって，独居高齢者の健康と対人関係に関する具体的な実態は個人の状況によって大きく異なるため，今後の課題として，より大規模に個別の調査を行ったりして把握することが必要である。健康面や対人関係の実態に対処するためには，個々の状況に合わせた支援プログラムやサービスが必要であることが明らかとなった。また，地域社会全体での支援体制の強化や，テクノロジーを活用したソリューションの検討も必要である。独居高齢者の健康と対人関係に関する具体的な実態は個々の状況によって大きく異なるため，今後の課題として，より大規模で個別の調査を行い，詳細な実態を把握することが求められる。

本研究の成果の学術的意義は，独居高齢者の健康状態や対人関係に関する詳細なデータを提供する点にある。これにより，独居高齢者に対する支援の必要性やその具体的な内容についての理解が深まり，将来的な研究や政策立案において重要な基盤となる。さらに，精神的な孤独感や社会的孤立という現代社会における重要な課題に対する新たな視点を提供し，これらの問題を解決するための理論的枠組みを構築する一助となる。

社会的意義としては，本研究が示す結果に基づいて，独居高齢者を支援するための具体的な施策やプログラムが実施されることが期待される。例えば，地域社会全体での支援体制の強化や，テクノロジーを活用したソリューションの導入などにより，独居高齢者の生活の質が向上し，社会的孤立や精神的な孤独感の軽減につながるであろう。また，本研究が提案するオンラインコミュニティ機構の構築は，地域のつながりを強化し，高齢者の社会参加を促進するための新しい手段となる可能性がある。これにより，高齢者がより安心して暮らせる社会の実現に寄与することが期待される。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計5件（うち査読付論文 5件/うち国際共著 0件/うちオープンアクセス 0件）

1. 著者名 Madoka Takahara, Hidetsugu Suto, Ivan Tanev, Katsunori Shimohara	4. 巻 142
2. 論文標題 Sleep Visualization through Indirect Biofeedback for Patients' Behavioral Changes and Sleep Quality	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 IEEJ Transactions on Electronics, Information and Systems	6. 最初と最後の頁 637-642
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.1541/ieejeiss.142.637	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 服部峻, 高原まどか	4. 巻 9
2. 論文標題 コンピュータ演習を伴うレポートに基づく単位認定の有効性検証	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 IP SJ-TOD	6. 最初と最後の頁 33-49
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 服部峻, 黒野真澄, 吉田裕太, 高原まどか, 工藤康生	4. 巻 16
2. 論文標題 ヒト型化オセロAIのための時間的制御	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 IP SJ-TOD	6. 最初と最後の頁 16-33
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 服部峻, 黒野真澄, 吉田裕太, 高原まどか, 工藤康生	4. 巻 16
2. 論文標題 個性除去を用いたツンデレキャラ型化チャットAIの対話応答制御	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 IP SJ-TOD	6. 最初と最後の頁 34-49
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 Madoka Takahara, Hinano Hoshi, Zijie Zhang, Keiko Yamazaki, Chihiro Miyashita, Yuri Teraoka, Reiko Kishi and Hidetsugu Suto	4. 巻 23
2. 論文標題 A study of a new visualization method toward promoting science communication regarding children's health	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 ヒューマンインターフェース学会論文集2021	6. 最初と最後の頁 619-626
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

〔学会発表〕 計3件 (うち招待講演 0件 / うち国際学会 0件)

1. 発表者名 高原まどか, 服部峻
2. 発表標題 親子で学ぶ睡眠教育のための協力型育成ゲームの提案
3. 学会等名 日本デジタルゲーム学会
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 Kosei Furukawa, Madoka Takahara, Hidetsugu Suto
2. 発表標題 Research on Supporting an Operator's Control for OriHime as a Telepresence Robot
3. 学会等名 HCI12021
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 古川孔晴, 高原まどか, 須藤秀紹
2. 発表標題 遠隔ミーティングにおける端末操作補助システムの提案
3. 学会等名 生命ソフトウェア・感性工房・而立の会 合同シンポジウム
4. 発表年 2020年

〔図書〕 計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
研究協力者	服部 峻 (Hattori Shun)		
研究協力者	下原 勝憲 (Shimohara Katsunori)		

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------